

卷第二 盲厥陰病

厥陰病者、裏瀧而寒熱相錯證、是也、其類有万二、曰上熱下寒、曰寒熱勝復、其熱俱非万有
相結、而以_二上熱下寒_一、爲_二之正證_一、

厥陰病とは、裏瀧にして寒熱相錯^{まじわる}證、是也、其類は二有り、曰く上熱下寒、曰く
寒熱勝復^{勝ったり報復したり}、其熱俱^{みな}相結^{むすぶ}（かたまる）を有^{たもつ}に非ずして、上熱下寒を以て、
之が正證と爲す、

提綱所万掲、其義可万見也、注家多混合爲万存、誤矣、

提綱掲げる所*、其義見るべし也、注家多く混合^{まじりあい}存を爲す、誤り矣、

* 厥陰病一條「厥陰之爲病 消渴氣上撞心 心中疼熱 飢而不欲食 食則吐蚘 下之利不止」

蓋物窮則變、是以少陰之寒極、而爲_二此病_一矣、

蓋し物窮^{きわまれば}則ち變わる、是以て少陰の寒極^{きわまりて}、此病を爲す矣、

其機福詳_二于少陰中_一、

其機福に少陰中に詳しい、

然亦有_下自万陽變者_上、少陽病誤治、最多致万之、以_二其位稍同_一耳、

然れども亦陽自より變わる者有り、少陽病誤治、最も多く之を致す、其位稍同*を以てす
耳、

* 厥陰の如き、則ち其部位、及び寒熱勝復、並本病^{少陽病}と稍相類似、乃ち其變爲、固もとより其分^{さだめ}也、(述少陽病)
少陽邪壅_二胸脇_一、本病熱在_二上焦_一、柯氏曰、少陽咽乾、侖厥陰消攻之機、胸脇苦滿、侖氣
上撞万心之兆、心煩、侖熱之初、不万欲万食、是饑不万欲万食之根、喜嘔、侖吐万蚘之漸、
故少陽不万解、轉屬_二厥陰_一而病危、厥陰病衰、轉屬_二少陽_一、而欲万愈、如_下傷寒熱少厥微、
指頭寒、不万欲万食、至_二數日_一、熱除欲万得万食、其病愈者_上、是已、此存稍當、平素陰瀧、
上盈下虧者、多遽變_二厥陰_一、

少陽邪が胸脇を壅^{ふさぐ}、本^元病熱は上焦に在り、柯氏曰く、少陽咽乾*、侖ち厥陰消攻*
*の機、胸脇苦滿、侖ち氣上つて心を撞^つくの兆^{きざし}、心煩、侖ち熱の初、食を欲せず、是
饑えて食を欲せずの根^{もと}、喜嘔、侖ち吐蚘^{ユウ・腹中に寄生する長い虫}の漸^{次第に進む}、故に少陽解せず
して、轉じて厥陰に屬くして病危^{病重くなる}、厥陰病衰えて、轉じて少陽に屬して、愈んと欲
す、傷寒熱少厥微***、指頭寒、食を欲せず、數日に至る、熱除かれ食を得んと欲す、其病
愈ゆる者の如し、是已^{のみ}、此存稍當^{あたる}、平素陰瀧、上盈^{みち}下虧^{かけ}者、多く遽^にわか
に厥陰に變わる、

* 少陽病一條「少陽之病 口苦 咽乾 目眩也」

** 厥陰病一條「厥陰之爲病 消渴 氣上撞心 心中疼熱 飢而不欲食 食則吐蛔 下之利不止」

*** 厥陰病十四條「傷寒熱少微厥 指頭寒 嘔嘔不欲食 煩躁數日 小便利色白者 此熱除也 欲得食其病爲愈 若
厥而嘔 胸脇煩滿者 其後必便血」

凋有_下自_二陽明病過下_一者_上、

調更に陽明病過ゆきすぎる下に自よる者有り、

開_二于陽明病中_一、又麻乱升麻湯條證、明係_二上熱下寒_一、而云_二傷寒六七日大下後_一、則可万知_二陽證過下、變爲_二厥陰_一、蓋彼條、其方可万疑、其證不可万疑矣、

陽明病中を開くに、又麻乱升麻湯條證*、明かに上熱下寒に係_二つながりて、「傷寒六七日、大下後」と云えば、則ち陽證過下、變わり厥陰を爲すを知るべし、蓋し彼條、其方疑うべきも、其證疑うべからず矣、

*厥陰病三十一條「傷寒六七日 大下後 寸脈沈而遲 手足厥逆 下部脈不至 喉咽不利 唾膿血 泄利不止者 爲難治 麻黃升麻湯主之 麻黃 升麻 當歸 知母 黃芩 萎蕤 芍藥 天門冬 桂枝 茯苓 甘草 石膏 白朮 乾薑」

其爲万證也、消攻、氣上撞万心、心中疼熱、饑而不万欲万食者、上熱之徵也、

其證を爲す也や、*「消攻、氣上撞心、心中疼熱、饑而不欲食」は、上熱の徵也、

*厥陰病一條「厥陰之爲病 消渴 氣上撞心 心中疼熱 飢而不欲食 食則吐蚘 下之利不止」

氣上撞万心者、邪火上聽所万爲、心中疼熱者、懊懣之甚也、饑而不万欲万食者、以_二熱壅_一上焦_一、故腹中雖万饑不万欲万食、瓜蒂散證、亦有_二饑不_一万能食、蓋涎與万熱、其因雖万異、其蒂則相似、

「氣上撞心」は、邪火上聽が爲す所、「心中疼熱^{煩悶の著しきもの}」は、懊懣^{むねやけ}の甚だしき也、「饑而不欲食」は、熱が上焦を壅^{ふさぐ}を以ての故、腹中饑うえると雖も食を欲せず、瓜蒂散證*、亦「饑不能食」有り、蓋し涎^{よだれ}**は熱と、其因^{原因}異ると雖も、其蒂***則ち相似、

*厥陰病二十九條「病人手足厥冷 脈乍緊者 邪結在胸中 心下滿而煩 飢不能食者 病在胸中 當須吐之 宜瓜蒂散」

*厥陰病五十二條「乾嘔吐涎沫頭痛者 吳茱萸湯主之 吳茱萸 人參 大棗 生薑」

***情之言猶性、蓋病之寒熱虛實、皆謂之情也 (叙述)

食則吐万蚘、下万之利不万止、下寒之徵也、

「*食則吐蚘^{ユウ・回虫}、下之利不止」下寒の徵也、

*厥陰病一條「厥陰之爲病 消渴氣上撞心 心中疼熱 飢而不欲食 食則吐蚘 下之利不止」

下寒、謂_二中下二焦_一、楊氏所万謂、熱在_二上焦_一、而中焦下焦癢寒無万熱耳、是也、金匱濕病、有_二丹田有万熱、胸上有万寒之語_一、先君子錯_二易寒熱字_一、爲_二之存_一曰、巢源、有_二冷熱不調候_一、云、陽并_二於上_一則上熱、陰并_二於下_一則下冷、而無_二上冷下熱之證_一、其故何也、蓋火性炎上、水性就万下、病冷熱不万調、則熱必僑_二于上_一、寒必沈_二于下_一、是所_二以無_一下熱上冷之候_一也、凡誤下之證、下焦之陽驟癢、氣必上逆、則上焦之陽、反因万下而成万實、以_二火氣不_一下行_一、故爲_二上熱下冷之證_一、此言誠發_二本病之理蘊_一、故今調拈_二于茲_一、又嶺南衛生方、載李待詔瘴瘧論云、余觀_二嶺南瘴疾證候_一、雖_二或不_一万一、大抵陰陽各不_二升降_一、上熱下寒者、十蓋八九、況人之一身、上焦屬_二丙丁火_一、中焦戊己土、下焦壬癸水、上固常熱、下固常冷、而又感_二此陽燠陰濕不万和之氣_一、自多_二上熱下寒之證_一也、此亦一理、仍附_二一存_一之、

下寒は、中下二焦を謂う、楊氏謂う所、熱が上焦に在りて、中焦下焦癢寒熱無き耳、是

也、金匱濕病「丹田有熱、胸上有寒」の語有り、先君子^{亡父の敬称・多紀元簡}寒熱字を錯^{錯誤}易^{とりか}えと、之が存を爲して曰く、巢源、冷熱不調候有り、云う、陽が上に并^{一つ}になるすれば則ち上熱、陰が下に并すれば則ち下冷、而^{しか}れども上冷下熱の證無し、其故は何也^か、蓋し火性炎上、水性下に就^{おもむ}く、病の冷熱調^ととのわざれば、則ち熱必ず上に僞き、寒必ず下に沈む、是下熱上冷の候無き所以^{ゆえん}也、凡そ誤下の證、下焦の陽驟^{にわか}に癢し、氣必ず上逆すれば、則ち上焦の陽、反って下すに因りて實と成る、以て火氣下行せず、故に上熱下冷の證を爲す^{以上多紀元簡「金匱要略輯義」の文と、}此言誠に本病の理^{法則}の蘊^奥深さを發す、故に今調^更に茲^こに拈^{引用}、又嶺南衛生方、載李待詔瘴癘論云う、余嶺南瘴疾證候を觀^みるに、或いは一ならずと雖も、大抵陰陽各升降せず、上熱下寒者、十蓋し八九、況^いわんや人の一身、上焦は丙^ひのえ丁^ひのと(心)で火に屬し、中焦は戊^{つち}のえ己^{つち}のと(脾)で土、下焦は壬^{みず}のえ癸^{みず}のと(腎)で水、上固^もとより常熱、下固より常冷、而^{しか}して又此陽燠^{イク・あたかい}陰濕和せざるの氣に感じて、自^{おの}ずから上熱下寒の證多き也^や、此亦一理、仍ち之に附存す、

是寒熱二證、一時併見者、故治法以^下三涼兼施^下爲^下万主、如^下烏梅丸^下、實爲^下其對方^下、
 是寒熱二證、一時併^あわ^せ見^あら^わす者、故に治法は三涼兼ねて施^ほど^こすを以て主と爲す、
 烏梅丸*の如き、實に其對^応・^あた^る方を爲す、

*厥陰病十三條「傷寒脈微而厥 至七八日膚冷 其人躁無暫安時者 此為藏厥 非蚘厥也 蚘厥者 其人當吐蚘 令病者靜 而復時煩者 此為藏寒 蚘上入其膈 故煩 須臾復止 得食而嘔 又煩者 蚘聞食臭出 其人常自吐蚘 蚘厥者 烏梅丸主之 又主久利 烏梅 細辛 乾薑 黃連 當歸 附子 蜀椒 桂枝 人參 黃蘗」

吐万蚘之機、從欠^下詳釋^下、以万意揣万之、蚘去万寒就万皿、故上入^下其膈^下、蚘在万膈、故心煩、然膈上非^下蚘宜^下久留^下之地^上、故旋下^下于胃^下、故須臾復止、胃陽無万權、雖万得万食徒築濁壅^下、故嘔、而蚘亦隨動、故又煩也、蚘聞^下食臭^下出者、言蚘爲^下食入^下、而不万安^下其所^下、復出上万膈、乃勢不万得万不^下從万嘔而出^下、此所^下以其人當^下万吐万蚘也、再塵得万食、似万非万謂^下食畢之後^下、或是及^下稍下^下万筋、則嘔又煩也、此爲^下蚘聞^下食臭^下、而上^下出于膈^下之故^上、驗^下之病者^下、往往爲万然、上存未^下必是^下、然提綱有^下食則吐蚘万之語^下、姑兩^下存之^下、

「吐蚘」の機、從う詳釋を欠く、意を以て之を揣^おし^はかる^に、蚘^{ユウ・回虫}は寒を去り皿に就く、故に上り其膈に入る、蚘は膈に在り、故に心「煩」、然り膈上は蚘久しく留^留まるに宜しき地に非ず、故に旋^まわり胃に下る、故に「煩須臾復止」、胃陽權^ちから無し、「得食」と雖も徒^{いた}ずらに濁^みだれる壅^ふさがる^を築す、故に「嘔」して、蚘亦隨^{した}が^って動く、故に「又煩」する也、「蚘聞^かく食臭出」は、蚘が食^くわんと入れども、其所に安んぜず、復出て膈に上がる、乃ち勢が嘔に從って出ざるを得ずを言う、此其人當に蚘を吐く所以也、再び塵^塵ざるに「得食」食畢^おわるの^後を謂うに非ざるに似る、或いは是稍筋^{チョ・竹の箸}を下すに及べば、則ち「嘔、又煩」する也、此蚘が食臭を聞いて、膈に上出するの故と爲す、之を病者に驗すると、往往然りと爲す、上存未だ必ずしも是^正しいとならず、然れども提綱*に「食則吐蚘」の語有り、姑^しば^らく之を兩存^そのままに^す、

*厥陰病一條「厥陰之為病 消渴氣上撞心 心中疼熱 飢而不欲食 食則吐蚘 下之利不止」

○陶隱居曰、椒、去万實、於_二鎗中_一微熬、令_二汗出_一、則有_二勢力_一、又當歸、本草稱万_三皿_二方_一中而古方多用散万寒、蓋此方所万用、亦取_二皿散_一、且本病癢燥、特用_二薑附_一、殆畏_二其僭_一、故凋_更配_二參歸_一、是潤養之功、亦自寓_二其中_一矣、

○陶隱居陶弘景曰く、椒蜀椒（山椒）、實たねを去り、鎗ソウ・煮炊きする器中に微すこし熬いる、汗出あぶらをぬくせしめれば、則ち勢力威力有り、又當歸、本草は中を皿めると稱して古方多用寒を散ず、蓋し此方鳥梅丸用いる所、亦皿散を取る、且つ本病癢燥、特に薑附を用いる、殆おそらく其僭僭・こえるを畏れる故に凋_更に參人參歸當歸を配す、是潤養の功、亦自ら其中に寓やどす矣、

乾薑乱芩乱連人參湯、亦宜万虵万用矣、

乾薑乱芩乱連人參湯*、亦宜しく用いるに虵すべし矣、

*厥陰病三十三條「傷寒本自寒下 醫復吐下之 寒格更逆吐下 若食入口即吐 乾薑黄芩黄連人參湯主之

乾薑 黄芩 黄連 人參」

此條不_二必謂_一本病正證、然其方固清万上皿万下、故用治_二本病_一、屢見_二應驗_一、喻氏曰、本自寒下、是其人之平素胃寒下利也、張氏曰、本自寒下、其人下癢也、並似万未万穩、要其譌招不万得_二強解_一、然大旨不万過_二本是胃癢膈熱_一、醫誤吐下、故熱搏_二于上_一、而冷甚_下于下_上也、醫復吐_二下之_一、復、當_下爲_二反義_一讀_上、乱元御曰、本自内寒下利、醫復吐_二下之_一、中氣愈敗、寒邪阻膈胃氣凋_更逆、脾氣凋_更陷、吐下不万止、若食方入万口侖吐者、是中脘癢寒、而上焦有万熱、宜_二乾薑乱連乱芩人參湯_一、乾薑、人參、皿_二補中脘之癢寒_一、乱連、乱芩、清_二泄上焦之癢熱_一也、此存稍妥、亦乱仲理曰、翻胃之初、亦可_二用止万髓而和_一万中也、柯氏曰、凡嘔家夾万熱者、不万利_二於香砂桔半_一、服_二此方_一而晏如、

此條厥陰病三十三條必_二ずしも本病正證を謂わず、然れども其方固く上を清清涼下を皿める、故に用いて本病を治するに、屢しばしば應驗ききめを見あらわす、喻氏曰く、「本自寒下」是其人の平素胃寒下利也、張氏曰く、「本自寒下」其人下癢也と、並みな未だ穩穩当に似ず、要ようするに其譌カ・謬招脱・はずれるに強すぐれた解を得ず、然れども大旨大体の意義は本是胃癢膈熱を過ぎず、醫誤まって吐下、故に熱が上に搏う・留滞ちて、冷が下に甚だしき也、「醫復吐下之」の復、當に反さらにの義意味を爲すと讀むべし、乱元御曰く、本自内寒下利、「醫復吐下之」中氣中焦の脾胃の氣愈ゆるに敗れ、寒邪阻膈胃氣凋_更に逆し、脾氣凋_更に陷不足、吐下止まず、若し食方類・たぐい口に入れば侖ち吐く者、是中脘中脘穴の部位癢寒にして、上焦熱有り、乾薑乱連乱芩人參湯に宜し、乾薑、人參、中脘の癢寒を皿補して、乱連、乱芩、上焦の癢熱を清泄する也と、此存稍妥、亦乱仲理曰く、翻胃反胃・食したものを吐くの初、亦用はたらきは髓を止めて中を和するべき也、柯氏曰く、凡そ嘔家で熱を夾はさむ者、香香附子砂縮砂桔桔梗半半夏で利せず、此方を服して晏如アンジョ・安らかで落ち着いている、

○凋有_二上熱下冷輕證_一、出_二兼變熱鬱_一、又滯下勞瘵痘疹等、其病之極、爲_二上熱下冷_一者、多難万治、

○凋_更に上熱下冷輕證有り、卷第四兼變の熱鬱に出る、又滯下勞瘵病痘疹等、其病の極、上熱下冷を爲す者、多く難治、

寒熱勝復者、其來路大約與_二前證_一相均、而所_二以有_一勝復_二者、在_二人身陰陽之消長、與_二邪

氣之弛張_二耳、

寒熱勝復_{勝ったり報復したり}者、其來路大約前證と相均_{ひと}しくて、所以勝復有る者、人身陰陽の消長_{榮えることと衰えること}と、邪氣の弛張_{チチョウ・興廢・おこることとすたれること}とに在る耳、

本篇第九條、汪氏注、以_二寒熱勝復證_一、分爲_二自愈、陽招、陽復不及、陽復太過四等_一、殆爲_二詳覈_一、魏氏則哂_二程氏勝復之存_一、多見_二其不_一万知万量矣、張兼善曰、陽極則陰生、陰極則陽生、此陰陽推盪、必然之理也、易云、窮則變、窮者、至極之謂也、陽至極而生万陰、故陽病有_二厥冷證_一、陰至極而生万陽、則厥逆者、有_二發熱之條_一、凡言_二厥深熱亦深_一者、乃事之極、而變之常、亦篤論也、

本篇第九條*、汪氏注、寒熱勝復_{勝ったり報復したり}證を以て、分_二區別し自愈と爲す、陽招_脱、陽復及ばず、陽復太過_{すぎること}四等_{四種の等級}、殆_{ほとんど}詳しい覈_{しらべ}を爲す、魏氏則ち程氏勝復の存を哂_{わらう}は、多く其量を知らざるに見_{あら}われる矣、張兼善曰く、陽極まれば則ち陰生れ、陰極まれば則ち陽生ず、此陰陽推盪_{スイトウ・おしうごかす}、必然の理也、易_{易經}云う、窮_{きわ}まれば則ち變わる、窮_{キウ}は、至極_{いたりきわまる}の謂也、陽至極にて陰を生じる、故に陽病に厥冷證有り、陰至極にて陽生じれば、則ち厥逆者、發熱の條有り、凡そ「厥深熱亦深」**を言う者、乃ち事の極にして、變の常、亦篤論_{トクロン・いきとどいた議論}也、

*厥陰病九條「傷寒先厥後發熱 下利必自止 而反汗出 咽中痛者其喉為痺 發熱 無汗而利必自止 若不止必便膿血 便膿血者 其喉不痺」

**厥陰病十條「傷寒一二日至四五日 厥者必發熱 前熱者後必厥 厥深者熱亦深 厥微者熱亦微 厥應下之 而反發汗者 必口傷爛赤」

○第七條、錢氏補_二復發熱三日利止七字_一、其存甚精、或曰、塵_二上下文、不_二必補_一而義自通、何者、云_二厥反九日而利_一、故承以_二凡厥利者云云_一、文熟相連接、蓋食以_二索餅_一、而熱來者、必在_二厥九日之後_一、是一日、後日熟_万之、侖指_二其翌_一、是一日、且日夜半愈、是一日、併爲_二三日_一、故下文結云_下復發熱三日、併_前六日_一、爲_中九日_上也、果如_二錢言_一、則冒首至_二三日利止_一、自爲_二一截_一、殊覺_二語意複_一、此存或有万理、塵_二此證食_一索餅_一後、分爲_二三證_一、一爲_下不_二發熱_一而自愈_上、此胃氣有万守、不_二爲万食而泄_一、能食乃爲_二佳兆_一、一爲_二除中_一、暴熱來出而復去、一爲_二熱來而續在者_一、錢注欠万瑩、故輯義引_二汪魏_一、以糾_二補之_一、尤氏曰、不_二發熱_一不字當万作万若、謬矣、

○第七條*、錢氏** 「「傷寒始發熱六日 厥反九日而利」の後に復發熱三日利止」七字を補う、其存甚だ精_{くわ}しい、或いは曰く、塵_案ずるに上下文、必ずしも補わずして義自ら通る、何者_{なんと}となれば、「厥反九日而利」と云う、故に承_うけるに「凡厥利者云云」を以てして、文熟相連接_{つながり}つづく、蓋し「食以索餅」にて熱來る者、必ず厥九日の後に在り、是一日、後日之を熟する、侖ち其翌を指して、是一日、「且日夜半_{陰極陽回之候・夜半から翌朝にかけて}愈」是一日、併_あわせて三日と爲す、故に下文結んで「復發熱三日、併前六日、爲九日」と云う也と、果_はたして錢言の如きは、則ち冒首三日利止に至る、自ら一截_{セツ・たちきる}を爲す、殊_{こと}に語意複_{かさねる}を覺える、此存_{あるものは}理有り、塵_案ずるに此證索餅_{ヘイ・小麦粉をこねて加熱してつくる食物の総稱}を食した後、分けて三證を爲す、一は發熱せずして自愈を爲す、此胃氣守_{防備}有り、食を爲して泄せず、

能食乃ち佳兆と爲す、一は除中を爲す、暴熱來出して復去る、一は熱來きたりて續いて在る者を爲す、錢注瑩^{エイ・あきらかさ}を欠く、故に輯義は汪と魏を引き、以て糾^{あわせ}之を補う、尤氏曰く、「不發熱」***の不字は當に若と作るべしと、謬^{あやまり}矣、

*厥陰病七條「傷寒始發熱六日 厥反九日而利 凡厥利者當不能食 今反能食者 恐為除中 食以索餅 不發熱者知胃氣尚在必愈 恐暴熱來出而復去也 後日脈之 其熱續在者 期之旦日夜半愈 所以然者 本發熱六日 厥反九日 復發熱三日 并前六日 亦為九日 與厥相應 故期之旦日夜半愈 後三日脈之 而脈數 其熱不罷者 此為熱氣有餘 必發癰膿也」

厥陰病六條「傷寒先厥後發熱而利者 必自止 見厥復利」

**錢漢「傷寒論證治發明溯源集」清代 多紀元簡「傷寒論輯義」(近世漢方医学集成・名著出版) 厥陰病七條に錢氏の文が引用されている以下全文。

(錢) 自_一始發熱_一、至_一夜半愈_一、是上半截原文、所_一以_一以_一万然者、至_一必發癰膿_一止、乃_一仲景自_一爲_一注脚_一也、但厥反九日而利句下、疑_一脫_一復發熱三日利止七字_一、不_一万然、如何_一下文有_一恐暴熱來出而復去_一二句_一、且_一所_一以_一以_一万然句_一下云、發熱六日、厥反九日、復發熱三日、并_一前六日_一、亦_一爲_一九日_一、是_一明明_一說出、其_一爲_一脫_一落_一無_一万疑_一矣、然_一何以_一知_一其_一爲_一復發熱利止_一乎、上_一條_一云、先_一厥_一後_一發_一熱、利_一必_一自_一止、況_一自_一万_一食_一索餅_一後、並_一不_一万_一言_一万_一利、以_一知_一其_一復_一發_一熱而_一利_一止_一也、言_一始_一初_一邪_一入_一厥陰_一、而_一發_一熱_一者_一六_一日、熱_一後_一厥_一者_一九_一日、是_一發_一熱_一止_一六_一日、而_一厥_一反_一九_一日、厥_一多_一于_一熱_一者_一三_一日_一矣、故_一寒_一邪_一在_一万_一裏_一而_一下_一利_一也、厥_一後_一復_一發_一熱_一三_一日、利_一必_一自_一止、大_一凡_一厥_一冷_一下_一利_一者、因_一寒_一邪_一傷_一万_一胃_一、脾_一不_一万_一能_一散_一万_一精_一以_一達_一于_一四_一肢_一、四_一肢_一不_一万_一能_一万_一稟_一氣_一于_一胃_一而_一厥_一、厥_一則_一中_一氣_一已_一寒_一、當_一万_一不_一万_一能_一万_一食_一、今_一反_一能_一食_一者、似_一乎_一胃_一氣_一已_一回_一、但_一恐_一爲_一下_一文_一之_一除_一中_一、則_一胃_一腸_一欲_一万_一絶_一、中_一氣_一將_一万_一除_一、胃_一中_一垂_一絶_一之_一虛_一陽_一復_一燄_一、暫_一開_一而_一將_一必_一復_一閉_一、未_一万_一可_一万_一知_一也、姑_一且_一食_一以_一索_一餅_一、索_一餅_一者、疑_一即_一今_一之_一條_一子_一麵_一、及_一罌_一子_一之_一類_一、取_一其_一易_一万_一化_一也、食_一後_一不_一停_一滯_一而_一發_一熱_一、則_一知_一已_一消_一万_一穀_一、胃_一氣_一無_一万_一損_一而_一尚_一在_一、其_一病_一爲_一必_一愈_一也、何_一也、恐_一其_一後_一發_一之_一暴_一熱_一暫_一來_一出_一而_一復_一去_一故_一也、食_一後_一三_一日_一脈_一之_一、而_一厥_一後_一之_一熱_一續_一在_一者、即_一期_一之_一明_一日_一夜_一半_一愈_一、所_一以_一以_一万_一然_一者、以_一其_一本_一發_一熱_一六_一日、厥_一反_一九_一日、計_一後_一三_一日_一續_一發_一之_一熱_一又_一三_一日、并_一前_一六_一日_一亦_一爲_一九_一日_一、與_一万_一厥_一相_一應_一、爲_一陰_一陽_一相_一均_一、勝_一復_一之_一氣_一當_一万_一和_一、故_一期_一之_一旦_一日_一夜_一半_一、陰_一極_一陽_一回_一之_一候_一、其_一病_一當_一万_一愈_一、所_一以_一謂_一厥_一陰_一欲_一万_一解_一時_一、自_一万_一丑_一至_一卯_一上_一也、所_一以_一謂_一後_一三_一日_一脈_一之_一、其_一熱_一續_一在_一、爲_一陰_一陽_一相_一當_一而_一愈_一、則_一其_一熱_一當_一万_一止_一矣、若_一脈_一仍_一數_一、而_一其_一熱_一不_一万_一罷_一者、此_一爲_一熱_一氣_一有_一餘_一、陽_一邪_一太_一過_一、隨_一其_一蘊_一蓄_一之_一處_一、必_一發_一癰_一膿_一也、

訓読 (錢)「始發熱」より、「夜半愈」に至る、是上半截^{セツ・たちきる}原文、「所以然者」から「必發癰膿」に至り止めるは、乃ち仲景自らの注脚と為す也、但厥反九日而利の句下に、「復發熱三日利止」七字を脱するを疑う、然らずば、如何に下文に「恐暴熱來出而復去」二句有らんや、且所以然句下に云「發熱六日、厥反九日、復發熱三日、并前六日、亦爲九日」、是明明說出、其脱落と為すに疑い無し矣、然れば何を以て其復發熱利止を為すを知る乎、上條云^{厥陰病六條}「先厥後發熱、利必自止」、況^いわんや索餅を食するより後、並利を言わず、以て其復發熱而利止を知る也、始初邪厥陰に入りて、「發熱者六日、熱後厥者九日」是發熱止六日にして、厥反九日、厥が熱より多きこと三日と言う矣、故に寒邪裏に在りて下利する也、厥後「復發熱三日」利必自止、大凡厥冷下利者、寒邪胃を傷ぶるに因る、脾は精を散じ以て四肢に達する能わす、四肢が氣を胃から^うける能わすして厥す、厥すれば則ち中氣已に寒、當に食する能わす、「今反能食者」胃氣已に回するに似たり、但恐らく下文の「除中」を為せば、則ち胃腸絶えんと欲す、中氣將に除れん、胃中垂絶の虚陽復燄^{ほのお}、暫開して將に必ず復閉すべし、未だ知るべからざる也、姑且「食以索餅」、索餅者、疑^{たぶん}即ち今の條子麵、及罌子の類、其化易きを取る也、食後停滯せずして發熱すれば、則ち已に穀を消し、胃氣に損なくして尚在るを知る、其病必ず愈ると為す也、何也、恐らく其後發するの「暴熱暫來出而復去故也」、食「後三日脈之、而厥後之熱續在者、即

期之明日夜半愈」、然る所以者、其「本發熱六日、厥反九日、計後三日續發之熱又三日、并前六日亦爲九日、與厥相應」を以て、陰陽相均ひとしい、勝復の氣當に和すると爲す、故に之を且日夜半、陰極陽回の候、其病當に愈るを期す、所謂厥陰解せんと欲する時、丑より卯上に至る也、所謂「後三日脈之」其熱續在、陰陽相當力が互いにつりあうことと爲して愈ゆれば、則ち其熱當に止るべし矣、若し脈仍數にして、其熱罷やまざる者、此熱氣有餘、陽邪太過と爲す、其蘊蓄の處に隨じて、必ず癰膿を發する也、

上文で錢氏「食後不停滯而發熱、則知已能消殺、胃氣無損而尚在、其病爲必愈也、」と云う。

素問長刺節論五十五「刺家不診、聽病者言」 傷寒論攷注で森立之は案文で「食以索餅不發熱者、知胃氣尚在必愈」の不の字は語助虚字・無駄な字と云う。 再案するに「不發熱者」とは暴熱來出せず、餅を食した後、其熱漸漸ゼンゼン・しだいに出來するを言う、不發熱乃ち未だ發熱せざるの義、とも云う。

○第十條、厥者必發熱、程氏曰、厥必從_下發熱_上得_上之、恐不_上万然、軒熙曰、本經必字、多預決_上一定日後_下之辭、此言爲_上万是、蓋此章言_下熱伏_上于内_下、而厥見_上于外_下之證_上、或有_上前厥者_下、是熱先鬱_上万裏、後日必熱_上發于外_下、或有_上前熱者_下、是熱先外達、後日必熱閉_上于内_下而厥矣、必發熱、後必厥、二句是雙關開法、且福言_上厥當_下万下_上之、則此厥、明屬_上熱鬱所_下万致、實以_上外厥之微甚_下、ト_上裏熱之淺深_下也、

○第十條*「厥者必發熱」程氏曰く、厥は必ず發熱を従い之を得ると、恐らく然らず、軒熙**曰く、本經の必字、多く預あらかじめ日後に決定するの辭、此言是と爲す、蓋し此章は熱が内に伏かくれるせて、厥が外に見あらわれるの證を言う、或いは前厥者有り、是熱先ず裏に鬱むすばれ、後日必ず熱外に發す、或いは前熱者有り、是熱先ず外達、後日必ず熱内に閉とどして厥す矣、「必發熱・・後必厥・・」二句是雙双關あいならぶ法、且つ福に厥を當に之を下すべしと言え、則ち此厥、明らかに熱鬱が致す所に屬す、實に外厥の微甚を以て、裏熱の淺深をトボク・うらなう也、

*厥陰病十條「傷寒一二日至四五日 厥者必發熱 前熱者後必厥 厥深者熱亦深 厥微者熱亦微 厥應下之 而反發汗者 必口傷爛赤」

**軒郵軒熙寧熙字世緝シユウ のきむらやすひろ (1789-1822) 駿河の人、多紀元簡の門人。 小曾戸洋先生私信

其證厥熱各發、不_上一時相兼_下、故治法、方_上其發熱_下、則用_上涼藥_下、方_上其發厥_下、則用_上皿藥_下、調停審酌、始爲_上万合万轍_下、倘失_上其機_下、必爲_上偏正_下矣、

其證厥熱は各おのおの發するに、一時に相兼ねず、故に治法、其發熱を方ただいとすれば、則ち涼藥を用い、發厥を方とすれば、則ち皿藥を用いる、調停審酌、始めて合轍常道に合するを爲す、倘もし其機を失すれば、必ず偏かたより正害を爲す矣、

湊氏傷寒大白曰、厥少熱多、熱不除必浩膿血、可_上万見_下熱病回_上万陰、陰證回_上万陽、均怕_上蔬與_下不及_下、是也、喻氏曰、塵厥陰篇中、次第不_上万一、有_上純陽無_下万陰之證_上、有_上純陰無_下万陽之證_上、有_上陰陽差多差少之證_下、大率陽熱陽證、當_上取_下用_上三陽經治法_下、陰熱陰證、當_上合_下用_上少陰經治法_下、厥陰病、見_上万陽爲_下万易万愈、見_上万陰爲_下万難万痊、據_上喻此存_下、本篇清涼諸方、恐其爲_上陽勝_下而設、皿補諸方、爲_上陰勝_下而設也、唯中間間有_下不_上必係_上本病_下者_上、豈不_上万過_下以_上万類隸_下万之乎、

湊氏傷寒大白曰く、「*厥少熱多・・熱不除、必浩便膿血、」熱病は陰に回まわり、陰證は陽に回る、均ひとしく蔬と不及を怕おそれるを見るべしと、是也、喻氏曰く、塵ちりずるに厥陰篇中、次第順序一統せず、純陽無陰の證有り、純陰無陽の證有り、陰陽差多差少の證有り、大率おおむね陽熱陽證、當に三陽經治法を取用すべし、陰熱陰證、當に少陰經治法を合用すべし、厥陰病、陽を見あらわすは愈ゆ易しと爲す、陰を見すは痊セン・いやす難しと爲す、喻氏此存に據よる、本篇清涼諸方、恐らく其陽勝と爲して設もうけ、皿補諸方、陰勝と爲して設ける也、唯中間まに必ずしも本病に係つながらざる者有り、豈類を以て之に隸したがうに過ぎざる乎か、

*厥陰病十六條「傷寒發熱四日厥反三日 復熱四日 厥少熱多者 其病當愈 四日至七日 熱不除者 必便膿血」

○當歸四逆湯條、錢氏柯氏注固是、或曰、此條之厥、當一厥熱勝復之厥一、蓋其寒本輕、但一時血氣不万通、仍致一厥寒一、而亦有一熱伏一于内一、故用一薑附一、則恐後日有一喉痺口爛浩膿血等之變一、此所下以別立一方一主中治上也、此存難万從、又程氏曰、血癩停寒、不一特不一万可万下也、并亦難万用万皿、蓋慮一薑附輩之僭一而燥一也、須下以皿万經、而兼一潤万燥和一万陽、却兼万烟万陰爲万上治、嶼氏曰、至一通草一、本經稱一其通一利九竅、及血熱關節一、則諸藥亦得一通草之功一、破一阻滯一而散厥寒一矣、兩存亦失万當、姑札備万攷、

○當歸四逆湯條*、錢氏柯氏注固く是、或いは曰く、此條の厥、當に厥熱勝復勝つたり報復したりの厥なるべし、蓋し其寒本元輕く、但一時血氣不通、仍なお厥寒を致して、亦熱伏が内に有り、故に薑附を用いれば、則ち恐らく後日喉痺口爛浩便膿血等の變有り、此別に一方を立て之を主治する所以也と、此存従い難し、又程氏曰く、血癩停寒、特に下すべからずにあらざる也、并あわせて亦皿を用い難し、蓋し薑附輩の僭潜・ひそんで燥を慮おもんばかる也、須すべからく以て經を皿めて、燥を潤うるおし陽を和するを兼ねて、却って陰を烟蒸するを兼ね治を爲すべし、嶼氏曰く、通草に至り、本經神農本草經其九竅キョウ・穴、及び血熱關節を通利すると稱すれば、則ち諸藥亦通草の功を得る、阻滯を破りて厥寒を散らす矣と、兩存亦當適合を失う、姑しばらく札かきしるすして攷考に備備える、

*厥陰病二十六條「手足厥寒 脈細欲絶者 當歸四逆湯主之 當歸 桂枝 芍藥 細辛 甘草 通草 大棗」

此厥陰病要領也、

仲景舉一死證一者、少陰特多、而厥陰反少、此理甚妙、人身以万陽爲万重、厥陰則寒熱相錯、用藥有万所一顧忌一、然比一之少 陰之純寒一、猶有一陽存一耳、嶼氏載一陳氏少陰厥陰之辨一、其存欠万覈、故不万札、

仲景死證を擧げるは、少陰特に多けれど、厥陰反かえて少ない、此理甚だ妙すぐれる・念入りである、人身は陽を以て重尊ぶと爲す、厥陰は則ち寒熱相錯まじわる、用藥に顧忌コキ・はばかるする所有り、然れば之を少陰の純寒に比くらべて、猶陽存たもちもつ有る耳、嶼氏が陳氏少陰厥陰の辨を載せる、其存覈核を欠く、故に札かきしるすせず、

要万之上熱下寒、與一寒熱勝復一、均無万所万傳、其唯陰陽和平、病當一快瘳一焉、

之を要すべくくるに上熱下寒、寒熱勝復とともに、均ひとしく傳わる所無し、其唯ただ陰陽和平のみ、病當に快瘳瘳すべし焉、

2009/12/15